

# 説明的な文章における他の文章でも活用できる力を育む授業づくり ー読みの技能を意識化させる活動を通してー

田辺市立高雄中学校  
教諭 後藤 雄 士

【要旨】 本研究は、読みの技能を意識化させる活動を通して、説明的な文章における他の文章でも活用できる力を育む授業を目指した。白石（2015, 2023）・堀（2016）の考えを参考に、他の文章でも活用できる力を「読みの技能」とし、中学校学習指導要領（平成29年告示）における「読むこと」領域の学習過程や指導事項に対応させ、一覧に整理した。また、読みの技能活用シートを作成し、生徒に読みの技能を意識化させ、活用させるための手立てとした。これらの取組から、読みの技能の意識的な活用は、他の文章でも活用できる力の育成に効果的であることが認められた。

【キーワード】 読みの技能、活用シート、意識化、意識的な活用、  
他の文章でも活用できる力

## 1 研究のねらい

所属校では、令和3～5年度の全国学力・学習状況調査及び和歌山県学習到達度調査において「読むこと」領域で全国平均との差が見られた。生徒からは、「授業とは違う文章だから読み取り方が分からない」や「どうやって読み取れば良いか分からない」といった発言が多く聞かれた。これらの発言は、生徒自身が授業でどのような力を身に付けてきたのかを自覚できていないこと、身に付けてきた力を意識的に活用できていないことを示唆するものと考えた。

筆者の授業を振り返ってみると、「読むこと」領域での指導は、当該の教材文を読み取ることに留まり、授業での学びが他の文章でも活用できる力になっているという認識をもたせることができていなかった。

これらを踏まえ、本研究では、「読むこと」領域において説明的な文章の指導に係る研究を行い、説明的な文章における他の文章でも活用できる力を育む授業を目指す。

## 2 研究の内容と方法

### （1）研究を進めるに当たって

研究を行うに当たり、説明的な文章における他の文章でも活用できる力を整理するため、白石（2015, 2023）と堀（2016）を参考にした。

白石は、「作品や文章の全体のつながりを捉えた読みを成立させるためには、何を読まなければならないかを明確にする必要がある。」（※1）と述べ、国語の基礎・基本となる10の観点を示した。そのうち、「読むこと」領域の説明的な文章に係る観点が、**図1**である。さらに白石は、「この読みの観点は、その教材だけでなく、他の教材にも生きる『他へ転移できる力』となるものである。」（※2）と述べている。

①題名	②段落	③指示語・接続語
④文型	⑤要点・要約・要旨	⑥構成
⑦くり返し	⑧比較しているもの・こと	
⑨一文で書く	⑩筆者の主張	

図1 白石（2015, 2023）の「説明文の読みの10の観点」

堀は、学習指導要領の「適切な表現」や「正確な理解」の要素を細分化し、日常の授業に使えると考えたものを、20の言語技術としてまとめた。そのうち、「読むこと」領域の説明的な文章に係る言語技術が、**図2**である。堀は、この言語技術を、名称とその概念をセットで理解し使うことで、「無意識に使っている言語能力について意識化させ、それを繰

り返すことによって自分なりの言語能力体系をつくっていく」(※3)と述べている。また、「すべての言語技術をすべての子どもたちがいかなる場面でも使えるようになること、それが言語技術教育の究極の目標」と述べている。(※4)

この二人の考える読みの観点や言語技術は、様々な説明的な文章に対応できるため、筆者の考える、説明的な文章における他の文章でも活用できる力を育む授業づくりの基盤になると考えた。

また白石は、読みの観点を、教師の教材研究の材料として活用することを前提としている一方で、生徒が活動に生かす上で国語の学習における様々な用語や読み取るための方法を知っておくことも重要だと考えている。そして堀の言語技術は、生徒にも共有し活用していくことを前提としている。そこで二人の考えを参考に、他の文章でも活用できる力を生徒にも分かるようにしたものを「読みの技能」とし、生徒に示すこととした。この読みの技能を学習における用語の一つとして生徒に認識させることで、その概念を共通理解させることができ、読みの技能の意識的な活用につながると考えた。表1は、中学校国語科における研究であることを踏まえ、中学校学習指導要領(平成29年告示)における「読むこと」の学習過程や提案授業を行う1年生の指導事項に対応させた上で、整理した一覧である。

基本的な言語事項 ①音読・黙読 ②語彙 ③表記 ④文体	内容の読解 ⑨接続語 ⑩指示語 ⑪理解要約 ⑫視覚資料
要旨の把握 ⑤文章構成 ⑥事実と意見・中心と付加 ⑦対比・類比 ⑧要旨	文章の評価 ⑬文種 ⑭吟味・評価 ⑮資料検索 ⑯主想
編集・活用 ⑰情報抽出 ⑱引用 ⑲表現要約 ⑳図解化	

図2 堀(2016)の『「読むこと(説明的文章)」20の言語技術』

表1 1年生の説明的な文章における読みの技能を整理した一覧

学習過程	指導事項	読みの技能
構造と内容の把握	ア 文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などについて叙述を基に捉え、要旨を把握すること。	①文章構成 ②段落 ③中心と付加 ④事実と意見 ⑤対比・類比 ⑥語句(接続語・指示語) ⑦要旨
精査・解釈	ウ 目的に応じて必要な情報に着目して要約したり、場面と場面、場面と描写などを結び付けたりして、内容を解釈すること。 エ 文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えること。	⑧要点の整理 ⑨要約 ⑩情報の抽出 ⑪情報の引用 ⑫図解化 ⑬資料効果の検討 ⑭文末表現の考察 ⑮内容等の吟味 ⑯内容等の評価
考えの形成、共有	オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにする。	①から⑯の読みの技能を組み合わせ活用し、読み取ったことを基に自分の考えをまとめ共有する。

(2) 研究の対象、方法

所属校の1年生(128名)4学級を対象に『言葉をもつ鳥、シジウカラ』の教材において全4時間の提案授業を実施した。

読みの技能の意識化に当たり、表1に示した読みの技能と、読みの技能についての説明を記載した読みの技能活用シート(図3)(以下、活用シートと略記)を作成した。活用シート下部には、生徒が読みの技能の活用に関する記述を行えるよう、振り返り欄を設けた。

また、本研究における読みの技能の意識的な活用

番号	読みの技能	読みの技能の説明	学習過程
□	①文章構成	①序論・本論・結論 ②双括型・頭括型・尾括型 構成から主張や全体の要旨を把握する	構造と内容の把握
□	②段落	①形式段落 ②意味段落 ※意味段落は「形式段落の内容(何について書かれた段落か)」を読み取ることでまとめられる	
□	③中心と付加	中心=内容の核心 付加=核心を構成する具体や論拠 ※中心は段落の初めか終わりの文に多い	
□	④事実と意見	事実=ありのまま 意見=話し手の感情を含む ※意見は副詞や文末に注目するとよい	
□	⑭文末表現の考察	断定的な言い切りや「と思われる」等のような濁した言い方の文末等から筆者の考えを読み取り検討する	精査・解釈
□	⑮内容等の吟味	構造内容把握・精査解釈で読み取ったこと(根拠)を基に、正当性や妥当性があるかを吟味する ※文と文のつながり、段落と段落のつながりの飛躍がないかを検討	
□	⑯内容等の評価	構造内容把握・精査解釈で読み取ったこと(根拠)を基に、正当性や妥当性があるかを吟味した上で、内容や構造等を評価する	
振り返り			
目標「 」を達成するために、あなたはどのようにしたのかを具体的に書きましょう。			
使った読みの技能を選択した理由と活用して感じたことを書きましょう。			

図3 読みの技能活用シート(一部抜粋)

による効果を分析するため、単元前及び第4時授業中に確認テストとアンケートを行った。これらの結果に加え、第3時の授業の成果物や各授業で用いた活用シートの記述内容を基に、「読みの技能の意識的な活用ができているか」及び「他の文章でも活用できる力が付いたか」について分析を行った。なお、単元前及び第4時授業中に行った確認テストはそれぞれ、授業で用いた教材とは異なる2つの文章を用いた。「読みの技能の意識的な活用ができているか」についての分析では、各授業で生徒が用いた活用シートの記述内容及びアンケートの結果を手掛かりとした。また、「他の文章でも活用できる力が付いたか」についての分析では、第3時の授業の成果物や単元前及び第4時授業中に行った確認テストにおける結果を手掛かりとした。なお分析は、当日欠席等で授業の成果物を提出できていない生徒及び確認テストを受験できていない生徒を除いている。

### 3 所属校における提案授業について（読みの技能を位置づけた単元構想）

提案授業を行うに当たり、本単元で付けたい力のうち、「C(1)エ 文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えること。」を主軸とした授業研究を行った。

提案授業における生徒の活用シートの使い方及び読みの技能の活用について説明する。

各授業の導入部において、生徒は単元目標と学習課題を確認した後、活用シートを用いて、対象時間の学習課題を解決するために効果的だと考える読みの技能を選択する。本研究では、第4時以外は授業者から読みの技能を指定し、それに加え、生徒も対象時間で効果的だと考える読みの技能を各自判断して選択する。第4時は更なる読みの技能の意識化を促すため、授業者からの指定は行わない。

各授業の展開部は、個別学習の後にグループ学習や全体交流を行う。生徒は個別学習において、課題解決に向けて取り組む中で、活用シートを参考に、選択した読みの技能を意識的に活用する。グループ学習では、個別学習で読み取ったことや考えたこと及び読みの技能の活用方法等について活用シートを用いて意見交流を行う。全体交流では、各グループで出た意見を発表し意見交流を行う。

各授業の終末部において、生徒は活用シートを用いて実際に活用した読みの技能を確認する。また、学習課題の解決に向けて、自身の行動や読みの技能を活用して分かったことや考えたこと、感じたこと等の振り返りを活用シート下部に記述する。

本単元計画（表2）は、次のとおりである。

表2 単元計画

<b>【単元目標】</b>			
(1)原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解することができる。 〔知識及び技能〕(2)ア			
(2)文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができる。 〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)エ			
(3)言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。 「学びに向かう力、人間性等」			
<b>【教材名】</b>			
「言葉」をもつ鳥、シジュウカラ（国語1「光村図書」）			
<b>【本単元における言語活動】</b>			
説得力をもたせるための筆者の文章構成や展開の工夫について、根拠を明確にして考えをまとめる。 （関連：〔思考力、判断力、表現力等〕C(2)ア）			
<b>【単元の評価規準】</b>			
	<b>知識・技能</b>	<b>思考・判断・表現</b>	<b>主体的に学習に取り組む態度</b>
①	本論の展開を読むことを通して、原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解している。(2)ア)	①「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えている。(C(1)エ)	①文章の構成や展開について粘り強く考え、学習の見通しをもって考えたことを文章にまとめようとしている。
<b>【指導計画】</b>			
<b>時</b>	<b>主な学習活動（■本時のねらい）</b>	<b>指定した読みの技能</b>	<b>評価規準・評価方法</b>
1	■文章の構成と内容を捉える。 ・単元の流れを確認し、単元の目標を理解する。 ・文章の構成と内容を捉える。	①文章構成 ②段落	
2	■論の展開について整理し、関係について理解する。	③中心と付加 ④事実と意見	[知識・技能] ① 成果物

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本論の展開について整理し，原因と結果，意見と根拠など情報と情報との関係について理解する。</li> </ul>	⑧要点の整理 ⑨要約	
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>■論の展開に着目し，その効果を考える。</li> <li>・筆者の文章の構成や展開の工夫による効果について，根拠を明確にして考える。</li> </ul>	⑮内容等の吟味 ⑯内容等の評価	[思考・判断・表現] ① 成果物
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>■結論に説得力をもたせるための筆者の工夫を，文章の構成や展開から粘り強く考え，学習の見通しをもって考えたことを文章にまとめる。</li> <li>・筆者の工夫と内容について考えをまとめる。</li> <li>・確認テスト及びアンケート。</li> </ul>	※授業者から指定せず，生徒に選択させる	[主体的に学習に取り組む態度] ① 成果物，活用シート

各授業における生徒の読みの技能の活用に関する授業者の動きについて説明する。

授業者は，生徒の活用シートの使い方や選択した読みの技能の妥当性，読みの技能の活用方法等についてフィードバックを行う。良い点についてフィードバックを行うことで，主体的で効果的な読みの技能の活用の促進につなげ，改善点についてフィードバックを行うことで，課題解決に至っていない生徒に対する支援とする。なお，課題解決に至っていない生徒に対しては，できていることについての評価を大切にする。

提案授業における，主なフィードバックは次のとおりである。第1時は，グループ学習時の意味段落分けで，多くのグループで課題が見られた。そのため，読みの技能を活用して，語句や文末表現を手掛かりとしている生徒やグループの様子を例示し，文の役割に着目させるフィードバックを全体に対して行い，内容を絞って意見交流をさせた。第2時は，第1時の学習で見られた良い点を全体へフィードバックすると共に，個別学習前に読みの技能③④を活用する際にも手掛かりとなる，語句や文末表現を全体に着目させた。また，個別学習時には，生徒の進度に応じて，机間指導時に活用シートを示しながら，③④の技能で本文の内容を押さえさせ，⑧⑨の技能で本文の内容をまとめさせる等，個別の状況に応じたフィードバックを行った。第3時及び第4時は，個別学習で内容の読み取りが進んでいない生徒に対し，活用シートを示しながら，前時までどの読みの技能を使ったのか，これまで文章をどう読み取ってきたか等を確認しながら生徒の課題を見極め，個別にフィードバックを行った。また，考えをまとめる際には，手立てとして表現の型を提示し，自分の考えを整理できるようにした。

授業を繰り返していく中で多くの生徒が，個別学習で活用シートを用いて読みの技能を理解した上で活用したり，グループ学習でどの読みの技能を使えば良いか等を意見交流したりできるようになっていった。

#### 4 本研究の結果分析

本研究の結果について，「読みの技能の意識的な活用ができているか」及び「他の文章でも活用できる力が付いたか」の2点について分析を行った。

##### (1) 「読みの技能の意識的な活用ができているか」

第4時の活用シートを分析した結果，自ら読みの技能を一つ以上選択した生徒(図4)は，91.5%であった。また，単元前と第4時授業中に行った，読みの技能に関するアンケート結果のうち質問3「説明的な文章(説明文・論説文など)で文章の構成や展開，表現の効果について考えるときに，どんなことに注目していますか。」で，「特にない」の回答が単元前のアンケートで40%を超えていたのに対し，第4時授業中のアンケートでは2%にまで減少した(表3)。

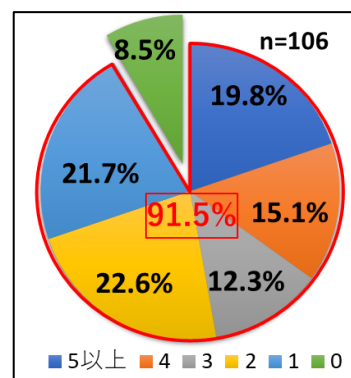


図4 第4時読みの技能  
選択数の割合

また，「読みの技能の意識的な活用ができているか」を分析するために，図4の結果と第4時の活用シートの記述内容を併せた分類を行った。分類に当たっては，分類基準として表4のA～Dの4類型を設定し，自身の選択した読みの技能をどのように活用したかを

具体的に記述している等、根拠をもって活用している生徒を概ね満足できる A 類型に分類し、それ以外の生徒を内容に合わせて B～D 類型に分類した。その結果が図 5 である。第 4 時では、読みの技能の意識的な活用ができていると判断できる A 類型の生徒の割合が 79.2%であった。

(2) 「他の文章でも活用できる力が付いたか」

第 3 時の授業の成果物及び単元前と第 4 時授業中に行った確認テストの記述内容を、単元の評価規準と照らして 4 類型(表 5)で分類した。このうち、概ね満足できる記述内容をア類型に分類し、それ以外の記述内容は、内容に合わせてイ～エ類型に分類した。その結果、第 3 時の授業の成果物において、ア類型の生徒の割合は 80.4%であった(表 6)。確認テストにおいては、単元前及び第 4 時授業中の両方を受験した生徒のうち、第 4 時授業中のア類型の生徒の割合は 53.3%であり、単元前と比較すると 18.7 ポイント向上した(図 6)。また、単元前にウ類型であった生徒のうち 21 名がア類型へ、エ類型であった生徒のうち 4 名がア類型となり、他の文章でも活用できる力を発揮できる生徒の割合が向上した。

5 成果と課題

上記 4 (1) にあるように、読みの技能に関するアンケートの結果が向上し、読みの技能の意識的な活用ができていると判断できる A 類型の生徒の割合が 79.2%であったことから、活用シートを用いた提案授業は、説明的な文章における読みの技能の意識的な活用に効果的であったと言える。これは、活用シートが手元にあることにより、読みの技能が明確になったからだと考える。また、上記 4 (2) にあるように、第 3 時の成果物で、概ね満足できる記述内容のア類型の生徒の割合が 80.4%となる結果が得られたのは、提案授業の中で、繰り返し活用シートを用いたことにより、個別学習で読みの技能への理解が深まり、その読みの技能を活用することで各授業の教材内容の理解も深まったからだと考える。また、グループ学習で読みの技能という共通の視点をもって生徒同士で意見交流をすることにより、個別学習では気付かなかった読みの技能に関する理解が深まるとともに、各時間の教材内容の理解が深まったからだと考える。さらに、単元前と第 4 時授業中に行った確認テストを比較した際、ア類型の生徒の割合が 18.7 ポイント向上となる結果が得られたことも、提案授業の中で、活用シートを用いた個別学習やグループ学習を繰り返し行ったことにより、読みの技能の理解が深まり、他の文章でも活用できる力を発揮できるようになってきたからだと考える。

一方、上記 4 (2) から、単元前と第 4 時授業中の確認テストの結果を比較した場合には、ア類型の生徒の割合の向上が認められるものの、第 3 時の成果物と第 4 時授業中の確

表 3 質問 3 の内容と推移 n=99

質問 3	説明的な文章(説明文・論説文など)で文章の構成や展開、表現の効果について考えるときに、どんなことに注目していますか。	
特でない	1 回目	43.8%
	2 回目	2.0%

表 4 読みの技能の意識的な活用に関する分類基準

A	読みの技能を根拠をもって活用している
B	読みの技能を根拠なく活用している
C	読みの技能に有用性を感じているが活用できていない
D	読みの技能に関しての記述がない

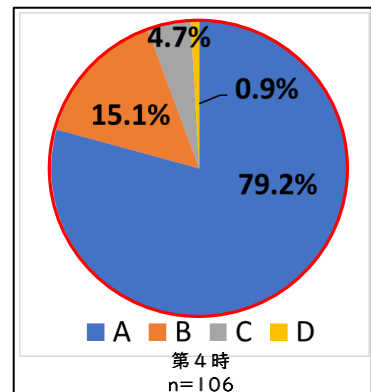


図 5 読みの技能の意識的な活用に関する分類結果

表 5 記述内容の分類基準

ア	文章の構成や展開の効果について記述されており、その根拠を明確にして記述されている
イ	文章の構成や展開の効果についての根拠は明確にして記述されているが、その効果について記述されていない
ウ	文章の構成や展開の効果について記述されているが、その根拠を明確にして記述されていない
エ	無解答・不明回答

表 6 第 3 時成果物の分類

第 3 時 n=97	ア	イ	ウ	エ
	80.4%	11.3%	5.2%	3.1%

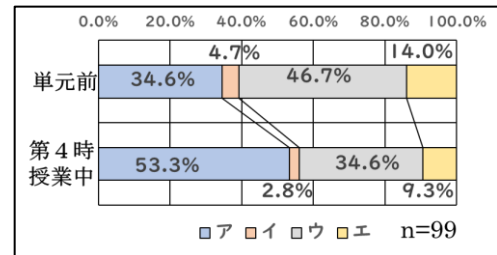


図 6 確認テスト記述評価の推移

認テストの結果を比較した場合には、ア類型の生徒の割合は低い結果となった。これは、授業時と異なり、確認テスト時には活用シートを用いたり生徒同士で意見交流したりできなかったことが要因と考える。このことから、生徒一人一人の読みの技能の定着がまだ十分ではなかったことが分かる。

今後は、読みの技能の定着を図るため、一つの単元だけではなく複数の単元で継続的に読みの技能を活用させ、実践を繰り返していくことが必要だと考える。そして、より読みの技能の理解が深まるよう、系統性を意識した活用シートの作成や運用を模索していくとともに、最終的には活用シートがなくても、他の文章でも活用できる力を発揮できる指導や実践を繰り返していく必要があると考える。また、読みの技能の定着を測るため、本研究では確認テストを作成したが、それ以外に、当該授業とは異なる文章を用い、単元末で実践練習及びどの程度読みの技能が扱えるかを測る小テスト等を行うことも効果的だと考える。

<引用文献>

- ※1 白石範孝『実践国語研究2023 2/3月号 どう育てる?どう鍛える?「国語力」×ミニ活動 SPECIAL』明治図書出版 p.8 (2023)
- ※2 白石範孝『実践国語研究2023 2/3月号 どう育てる?どう鍛える?「国語力」×ミニ活動 SPECIAL』明治図書出版 p.8 (2023)
- ※3 堀裕嗣『国語科授業づくり10の原理100の言語技術』明治図書出版 p.49 (2016)
- ※4 堀裕嗣『国語科授業づくり10の原理100の言語技術』明治図書出版 p.15 (2016)

<参考文献>

- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』東洋館出版社 (2022)
- ・白石範孝『白石流国語授業シリーズ 2 説明文の授業』東洋館出版社 (2015)
- ・白石範孝『実践国語研究2023 2/3月号 どう育てる?どう鍛える?「国語力」×ミニ活動 SPECIAL』明治図書出版 (2023)
- ・堀裕嗣『国語科授業づくり10の原理100の言語技術』明治図書出版 (2016)
- ・文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』東洋館出版社 (2018)